

P-4B-162

看護補助者業務拡大に向けた体制作り —ブロック体制による取り組み—

長野赤十字病院 循環器病センター

○黒岩 直美、野村 純子、寺澤 美奈、丸山 妙子

【はじめに】平成24年度の診療報酬改定では、以前の基準を上回る看護補助者(以下補助者)等の配置が手厚く評価された。A病院では、平成22年度改定後より補助者を中心とした補助者業務改善プロジェクト(以下補助者会)の活動を行っている。補助者の役割を明確化するために業務手順や書類・薬品類の明示の統一化、補助者のタイムスタディー調査などの取り組みを行っている。また、業務の拡大が図れることを目的とした補助者研修を実施している。今回、補助者が、補助者の休暇や欠勤を把握して、補助者1名の部署や補助者の休暇中に他部署の業務支援を行うことを目的として、部署の組み替えを行いブロック体制の見直しを行った。ブロック体制での取り組みにより、補助者間の業務の連携強化が図れ看護業務軽減に繋がったためここに報告する。【ブロック体制の実施内容】1. 補助者1名の部署へのリリーフ体制・部署間の連携確立に向けた体制づくり(補助者ブロック長を中心とした取り組み)2. 新ブロックでの取り組み実施(シフト交換・環境整備・リリーフ・年末年始のブロック業務の実施)3. 年末年始補助者業務タイムスタディーの実施。【まとめ】ブロックのブロック長は、月毎に補助者の休暇を把握して、ブロック間の支援体制を行えるようになったことは大きな成果である。また、年末年始に、補助者がシフトを組み出動して、ブロック内の業務を実施することが出来た。日々ブロック活動を実施している部署での業務であったため、スムーズに業務が実施でき、看護師の業務軽減につながった各部署の入退院、転棟数や、患者の状況で、業務内容にも違いがあり、ブロックの組み合わせ部署に対する問題も明確になった。

P-4B-164

部署全員で取り組む5S活動

高松赤十字病院 看護部

○田岡 昭見、岡部 満寿子、大林 千秋

益々煩雑化・多忙化する業務に追われ、業務のしにくさや雑然とした環境に問題を感じながらも流される日々を過ごしていた。雑然とした環境に於いては、整理・整頓をはじめとした衛生管理に関する感受性も鈍り、惰性に陥っていた。業務においては、しなければならぬ内容が増えるばかりで時間外業務の延長につながっていた。そこで、そのような状況を改善するために、部署をあげて5S活動に取り組んだ。まず、年間を通して5S活動を中心となすべく、係長を任命し、部署で改善が必要と考える内容を全員から募った。集まったものは、処置室や語所の棚、ワゴンや車椅子等の整理に始まり、パソコンのフォルダ内の整理、リーダーや選出勤務者の業務板の見直し、業務におけるチェック表の作成等と多岐に渡ったため、12のグループに分類した。そして、スタッフ全員が何らかの担当になるようにグループそれぞれに担当者を割り振った。それぞれの担当者は割り当てられた事項についてはそれぞれが責任をもって整理し、実施したことが継続して活用されるようにスタッフに周知し、定着するようにした。結果、以下のような成果があった。物の整理したことにより処置室における準備や在庫状態の確認・補充がしやすくなった。また、業務内容も整理し、実施状況を確認しやすくなることで、洩れなく実施することができるようになった。それと共に、スタッフ全員で5S活動に取り組んだことにより、互いの成果を認め合え、各々の5Sに関する意識が高まった。まだまだ、改善途中であるが、職場全員で5S活動に取り組むことにより、日常業務の効率性や安全性が高まるとともに、スタッフのモチベーションの向上や職場風土の改善に繋がった。

P-4B-166

点眼指導導入前における本病院の状況報告

京都第二赤十字病院 看護部¹⁾

日本赤十字社幹部看護師研修センター²⁾

○佐川 未奈¹⁾、大山 早苗¹⁾、福田 政代¹⁾、中川 典子²⁾

【目的】K病院白内障患者はクリニカルパス適応であり、入院日数の短縮により点眼指導が確実に出来る退院するケースがある。現在の点眼指導での患者の点眼手技獲得状況を把握するため現状の調査を行い、その結果が出たのでここに報告する。【研究方法】対象は40～90歳代の白内障手術患者計35名。先行文献を元に9項目の点眼チェックシートを作成した。入院時担当看護師がチェックリストに沿って手技を評価し、術後1日目に再評価を行い看護師各自が点眼指導を実施した。出来ているが1点、出来ていないを0点として総得点を出した。【結果・考察】点眼手技9項目の総得点の平均を入院時と手術後と比較すると、入院時4.43点、術後6.06点と術後の点数が有意に高かった(p=0.00)。手技の各項目において「手を清潔にする」「蓋の清潔」「眼瞼を引く」「点眼薬をふき取る」で有意差がみられた。また、「必要な点眼薬の準備」「拭き取り紙の準備」「顔を仰向けにする」「先端が眼に触れない」「点眼薬を1滴落とす」では有意差がなかった。有意差がみられた理由としては、看護師各自が合併症の理解を踏まえた上で指導を行ったことにより効果が上がったと考える。有意差がなかった理由としては、対象者の加齢に伴う身体能力や認知機能の低下、入院期間の短縮化が原因と考える。また、有意な点眼方法が獲得されておらず手技に個人差があり、点眼薬の形状や硬さに加え後発薬の処方による名称の違いが混乱を招いていることも要因と考える。【結論】入院後の指導により、点眼手技が向上した人数は確実に増えていた。指導効果の高い手技もあるが、口頭のみでの指導では効果が期待出来ない手技もある。入院前より統一した点眼指導を行うことで、入院時・手術後の更なる手技向上に繋がった可能性がある。

P-4B-163

固定チーム・ディパーター方式における 業務内容の現状調査

福井赤十字病院 看護部

○布谷 喜代美、真鍋 照美、齋藤 みどり、西川 順子、
内田 一美、内田 智美、林 靖子

【はじめに】A病院は、固定チーム継続受け持ち制を基本として、看護師が2人1組でパートナーシップを発揮し日々の業務を行う固定チーム・ディパーター方式(以後DPNS)を考案し、平成24年度より導入している。しかし一部の業務をペア以外の他の看護師が行い、その情報共有が不十分な為、DPNS本来のパートナーシップを発揮した看護が浸透していない現状があった。そこで、H26年度は、DPNSの業務内容の標準化を行い、更に各部署の特殊性を踏まえた業務基準を作成し浸透を図り、DPNSにおける業務内容の現状調査を行った。【方法】A病院13病棟の看護師398人にくら置及びケアに関する18項目、<観察・看護記録>に関する16項目からなる独自の質問紙調査を実施し、6段階評価を行った。【結果及び考察】<処置及びケア>の項目では、点滴管理、内服管理及び清潔ケアが70%以上ペアで行っていた。しかし血糖測定、吸入、経管栄養、採血は30～40%であった。これらが低かった要因としては、ペア以外の看護師が処置やケアを担当している病棟があったためである。本来はペアで行うことが望ましいが、ペア以外の看護師が処置やケアを行う場合は、その情報をペアが共有する必要がある。<観察・看護記録>の項目は、観察、情報収集、看護師経過記録等がペアで60%前後行っていた。DPNSはペアでベッドサイドで看護記録を行うことを推奨しているが、今回の結果よりまだ浸透されていないことが分かった。ペアでベッドサイドで記録することは、タイムリーで正確な看護記録と、患者に迅速な対応が出来る。DPNSでは、ペアで患者の状態や情報を共有し共にアセスメントすることが患者の安全や安楽を考えると重要である。今後は、ベッドサイドでの看護記録記載の徹底を推進していきたい。

P-4B-165

NSTリンクナースの栄養管理の意識と介入行動の実態

福井赤十字病院 NSTリンクナース委員会

○豊島 鈴恵、手塚 日暖、坂井 真理恵、浜野 みゆき、
西川 順子、中野 敦子

【目的】本院では2008年度より毎年、NSTリンクナース(以下リンクナース)に栄養管理についての勉強会を実施してきた。2013年度は第5回日本静脈経腸栄養学会北陸支部会例会で発表したように、リンクナースの栄養管理の意識と介入行動、勉強会が効果的であったかを明らかにし今後の教育活動に役立てるため、栄養管理への意識と介入行動の実態を比較検討したが、勉強会実施前後で有意差はみられなかった。そこで勉強会に、より興味をもって参加してもらえよう、2014年度はリンクナースの意向を取り入れた勉強会を計画し、実施前後の栄養管理の意識と介入行動の実態を比較検討した。【方法】当院リンクナース16名を対象に、勉強会の内容について希望調査を実施し、それをもとに全6回の栄養管理について勉強会を実施した。初回勉強会実施前と最終回勉強会実施後にリンクナースの栄養管理に対する意識と介入行動について5段階のリッカート尺度を用いた無記名式質問紙調査を実施し、その結果を比較検討した。【結果】質問紙の回収率は100%であった。意識に対する質問では10項目中7項目で勉強会前後の平均値が改善し、7項目で平均値が昨年を上回った。また、介入行動についての質問では11項目中8項目で平均値が改善し、8項目で平均値が昨年を上回った。調査で得たリンクナースの意向を取り入れ、幹脈栄養についての勉強会を強化したところ、静脈栄養についての項目で有意差が見られた。介入行動の項目でリンクナース歴2年目以上のリンクナースでは3項目で有意差がみられた。【結論】リンクナースの意向を取り入れた勉強会はリンクナースの栄養管理の意識や介入行動の向上に効果があった。継続した勉強会の開催は介入行動へも効果があるため今後も継続して活動を行っていく。

P-4B-167

すべての人に挨拶ができる看護師の育成

～挨拶場面の動画を利用して～

福井赤十字病院 看護部¹⁾、同 看護係長審議グループ²⁾

○高島 恵^{1,2)}、福田 清美^{1,2)}

【はじめに】当院では患者満足度向上部会の下部組織である接遇改善推進ワーキンググループを中心に接遇改善活動を行っている。平成26年度は「いつでもどこでも誰にでも挨拶ができる」という目標を立て活動を開始した。看護係長会においても同じ目標達成に向けグループを作り活動を行った。動画と職員デジタルサイネージを用いて挨拶場面の指導を行った結果を報告する。【目的】すべての人に挨拶ができる看護師の育成を行う。【方法】朝外来開始前に職員の挨拶行動について現状調査を行った。その結果、会話しており患者に気付かずすれ違う看護師、外来待ちで座っている患者の前を挨拶せず通る看護師が見られた。そこで「患者とすれ違うとき」「患者を追い越すとき」「椅子に座っている患者の前を通るとき」の3場面について悪い事例の動画を作成し、挨拶の方法についてロールプレイング勉強会を実施した。その後正しい挨拶の方法についてパンフレットを作成し、それを用いて指導を行った。さらに正しい挨拶の方法を職員デジタルサイネージで流してPRした。【結果及び考察】看護師・職員間の挨拶の実施は94%から100%に、患者への挨拶は46%から79%と共に上昇がみられた。患者の前を通過するとき、実際にどのように挨拶すればよいか方法がわかり、挨拶を実践できる看護師が増えた。またデジタルサイネージは全職種向けに発信されるため看護師だけでなく、他職員へのアピール、意識付けにつながった。病院に一步入ったときから接遇は始まっている。そのことを職員全員が意識し行動していく必要がある。【結論】動画を用いた指導は、接遇対応行動を客観的に見ることが出来、看護師の育成に有効であった。

10月15日(木)
一般演題・ポスター